

## 焼岳の火山活動解説資料 (令和8年1月)

気象庁地震火山部  
火山監視・警報センター

山頂付近の微小な地震活動が継続しているなか、25日02時頃から地震回数が増加しました。また、傾斜変動観測では、25日01時頃から山頂方向上がりの変動が認められました。

焼岳では火山活動が高まっており、25日05時50分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）に引き上げました。想定火口域から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。噴火時には、風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

## ○ 活動概況

## ・地震の発生状況（図1-1②③、図1-2、図2、図6-④⑤、図9～11）

山頂付近の微小な地震活動（焼岳山頂付近の概ね海拔0km以浅が震源と推定される地震）が継続しているなか、25日02時頃から火山性地震が増加しました。その後は減少傾向が認められています。

火山性微動は観測されていません。

## 【山頂付近以外の焼岳周辺の地震活動】

今期間、低調に推移しました。

## ・噴気など表面現象の状況（図1-1①、図3～5、図6-①～③、図12）

26日に岐阜県の協力により実施した上空からの観測では、北峰南側噴気孔や隠居穴噴気孔等で引き続き噴気が認められましたが、前回（2025年3月）の観測と比較して、噴気の状況に特段の変化は認められませんでした。また、山頂付近では新たな噴気や噴出物の痕跡は認められませんでした。

北陸地方整備局が設置している焼岳北監視カメラ（焼岳の北北西約4km）、焼岳東監視カメラ（焼岳の東南東約2.5km）及び焼岳南西斜面監視カメラ（焼岳の西南西約2.5km）による観測では、北峰付近の噴気、黒谷火口及び岩坪谷上部の噴気の高さは、いずれも90m以下で経過しています。

## ・地殻変動の状況（図1-1④～⑥、図1-2、図7～9）

傾斜計による観測では、25日と27日に山体浅部の膨張を示唆する山頂方向上がりのわずかな変動が観測されました。

GNSS連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化が続いています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

次回の火山活動解説資料（令和8年2月分）は令和8年3月9日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、北陸地方整備局、国土地理院、京都大学、名古屋大学、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

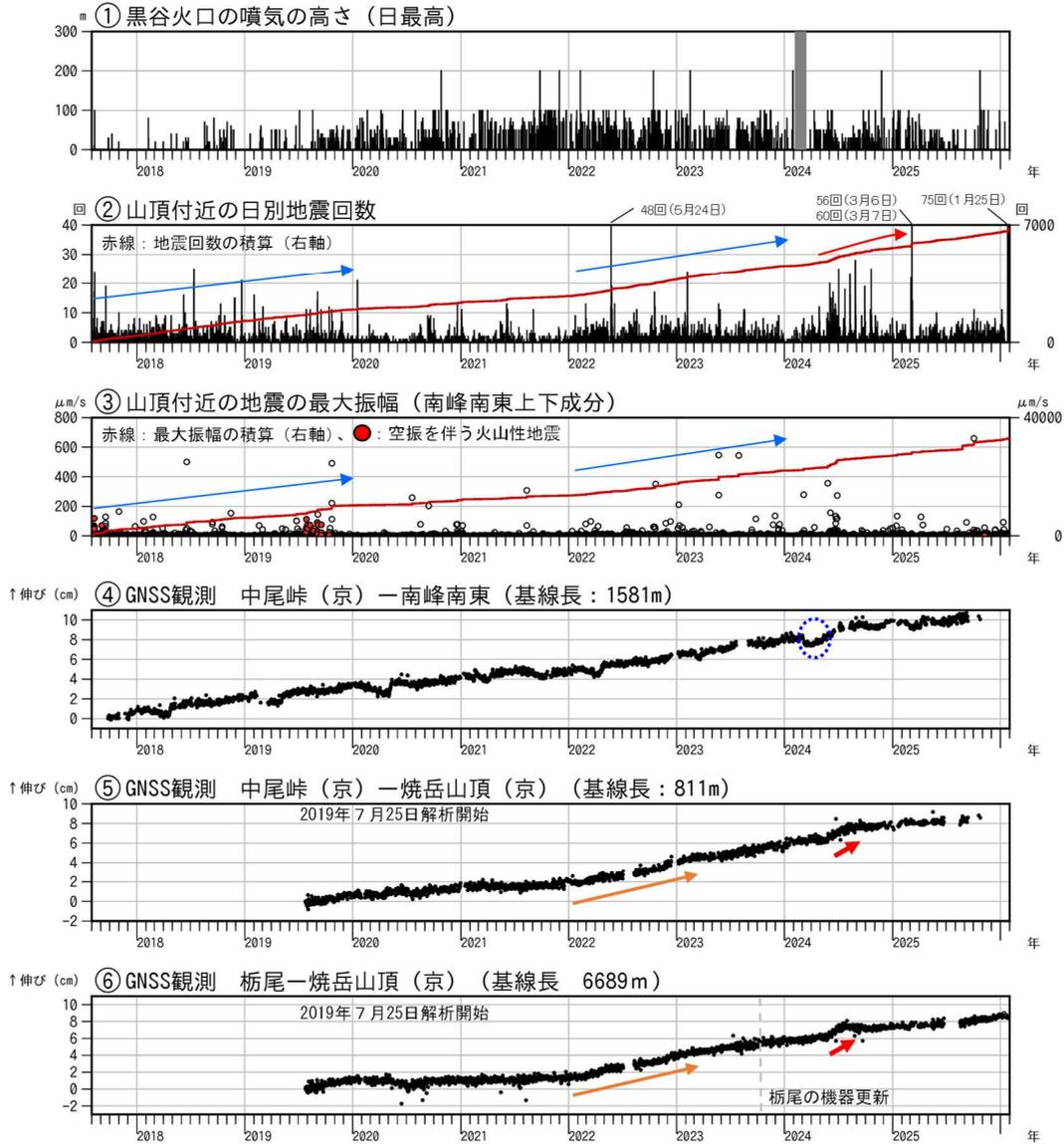


図 1-1 焼岳 火山活動経過図（2017年8月1日～2026年1月31日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅  $1.0 \mu\text{m/s}$  以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことです。山頂付近の地震については、図 2 も参照。

① 灰色の期間（2024 年 2 月 5 日～3 月 14 日）は欠測を示します。

④⑤⑥は図 8 の基線⑥⑧③に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（京）は京都大学の観測点です。

④の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

- ・ 黒谷火口では、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えていきます。
- ・ 山頂付近の微小な地震（焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震）が継続しています（②）。
- ・ 2022 年 1 月頃から 2023 年末まで、山頂付近の地震回数に増加傾向がみられましたが、2017 年 8 月から 2019 年末の期間にみられた地震活動（積算曲線の勾配）とほぼ同程度です（②③青矢印）。2024 年 5 月下旬から 2025 年 3 月上旬にかけて、時々短期的な増加がみられました（②赤矢印）。2026 年 1 月 25 日に地震回数の増加がみられましたが、その後減少傾向が認められています。
- ・ 山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる伸びの変化が継続しています（④⑤⑥）。
- ・ ⑤⑥の基線では、2022 年 1 月頃から 2023 年 2 月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化率がやや大きくなりました（橙矢印）。また、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024 年 5 月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しました（赤矢印）。

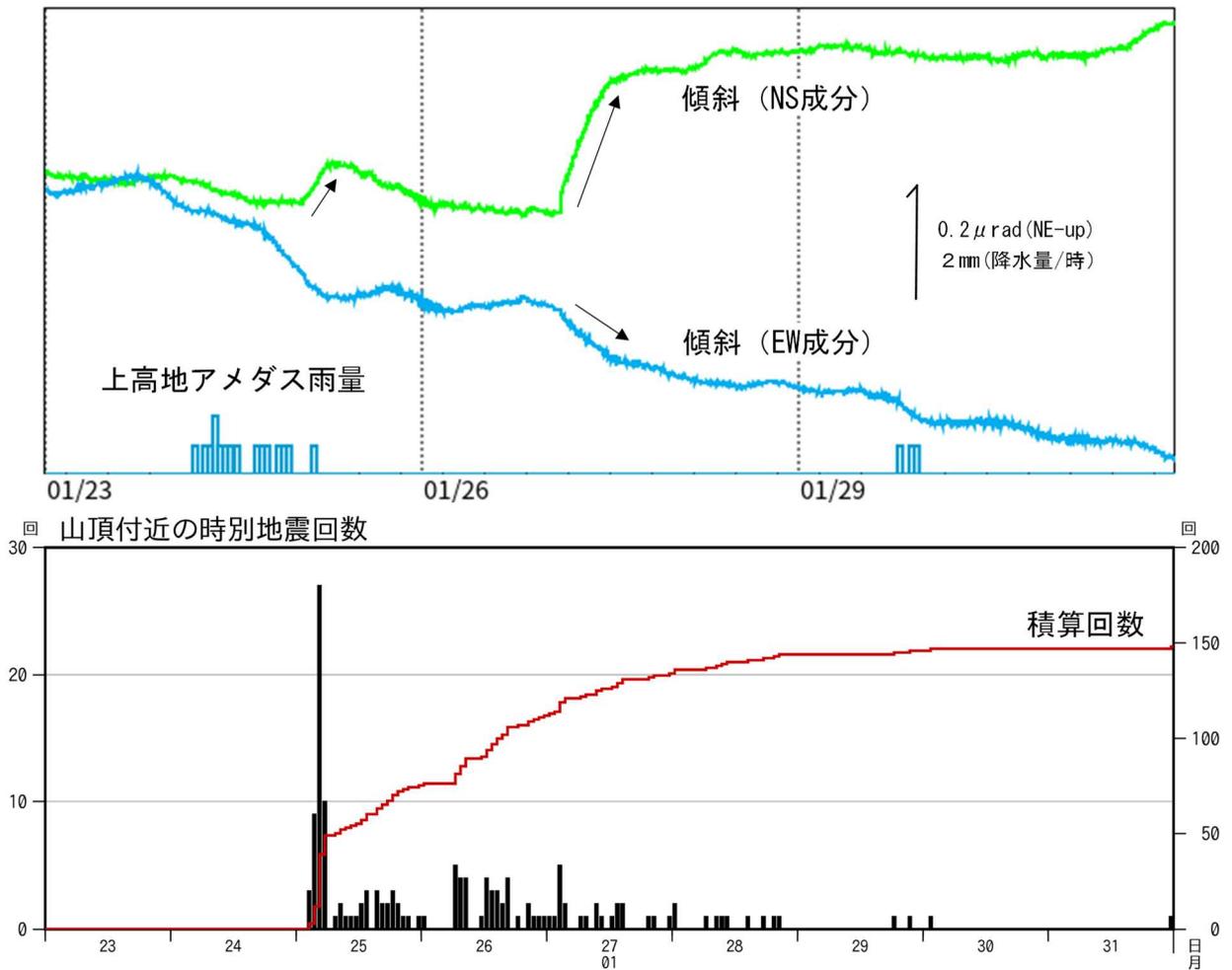


図1-2 焼岳 南峰南東観測点における傾斜データと山頂付近を震源とする地震の時間別回数（2026年1月23日～2026年1月31日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅  $1.0 \mu\text{m/s}$  以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことです。山頂付近の地震については、図2も参照。

・25日01時頃から06時頃と27日02時30分頃から13時頃にかけて、それぞれ山体浅部の膨張を示唆する山頂方向上がりのわずかな傾斜変動が観測されました（黒矢印）。

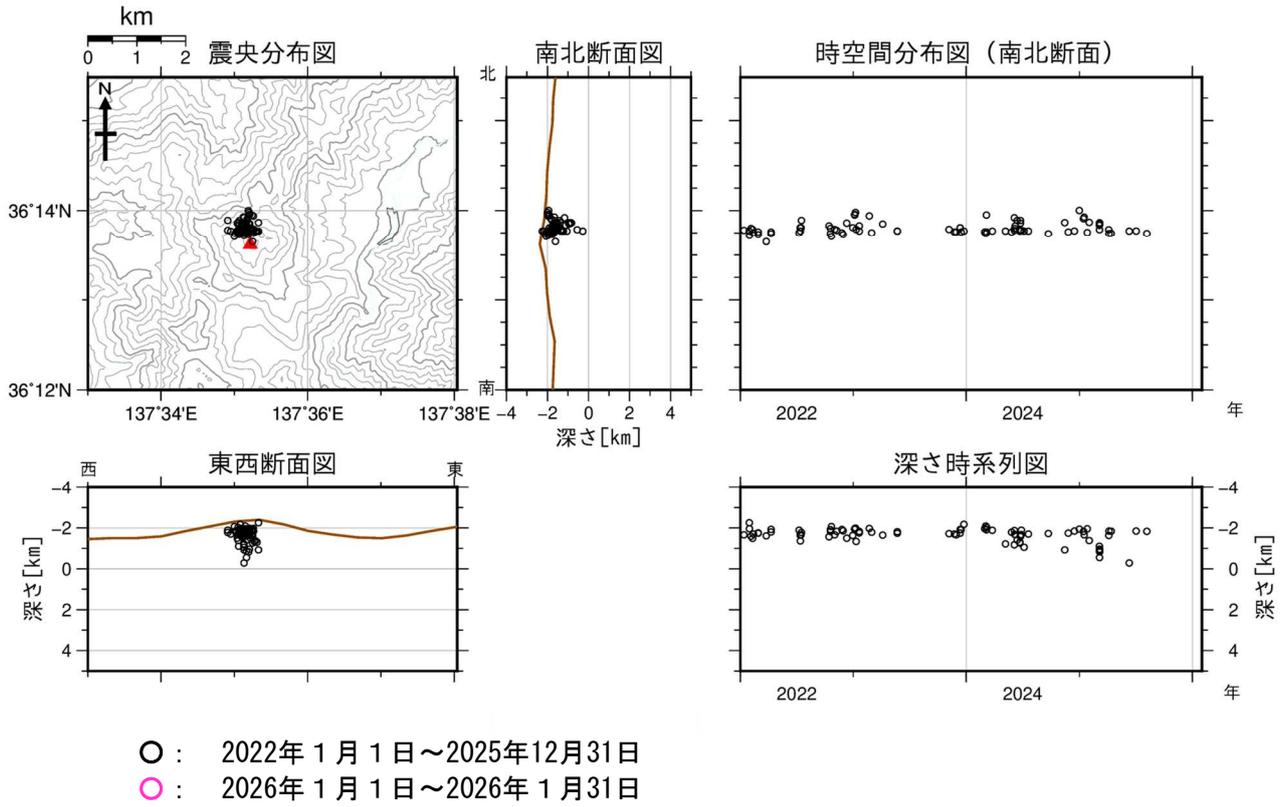


図2 焼岳 山頂付近の地震の震源分布図（2022年1月1日～2026年1月31日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間1.0秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔0 km以浅が震源と推定される地震のことです。

観測点の稼動状況により、求まる震源の数の減少や位置の精度低下が生じる場合があります。

- ・ 震源は、山頂付近の深さ0 km（海拔0 km）以浅に分布しています。
- ・ 今期間、震源が求まる地震はありませんでした。



図3 焼岳 山頂部及び南西斜面の状況

（上図：焼岳北監視カメラ、下左図：焼岳南西斜面監視カメラ、下右図：焼岳東監視カメラ）

・噴気活動に特段の変化はありません。

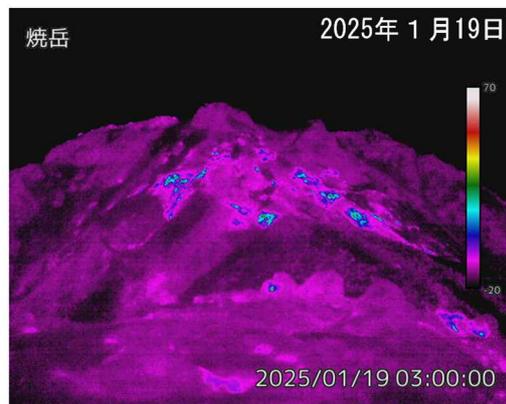
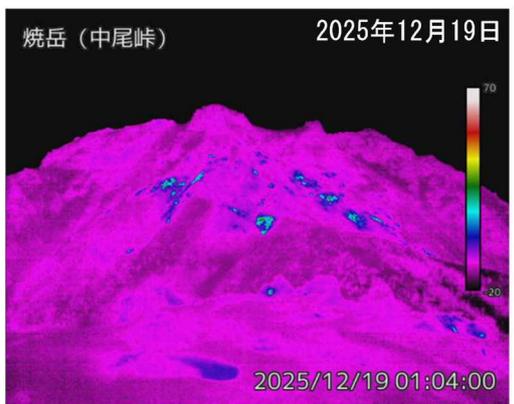
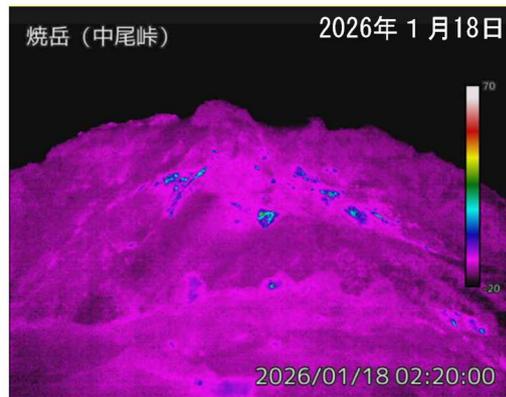


図4 焼岳 中尾峠赤外熱映像カメラによる焼岳の北側斜面の地表面温度分布と可視画像

撮影場所と撮影方向は図12を参照。

・前月（左下図）及び前年（右下図）と比較して、噴気の状態や地表面温度分布に特段の変化はありません。



2026年1月26日



2025年3月14日

図5-1 焼岳 山頂付近の噴気の状態  
撮影方向は図12参照。

- ・26日に岐阜県の協力により実施した上空からの観測では、前回（2025年3月14日）の観測に引き続き、北峰南側噴気孔及び隠居穴噴気孔で噴気が認められましたが、噴気や噴気孔周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。



2026年1月26日



2025年3月14日

図5-2 焼岳 黒谷火口周辺の状況  
撮影方向は図12参照。

- ・黒谷火口では噴気は認められませんでした。前回（2025年3月14日）の観測と比較して、黒谷火口周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。



図5-3 焼岳 北側及び西側斜面の状況（1月26日）  
撮影方向は図12参照。

・山頂付近では新たな噴気や噴出物の痕跡は認められませんでした。



図5-4 焼岳 南側及び東側斜面の状況（1月26日）  
撮影方向は図12参照。

- ・山頂付近では新たな噴気や噴出物の痕跡は認められませんでした。

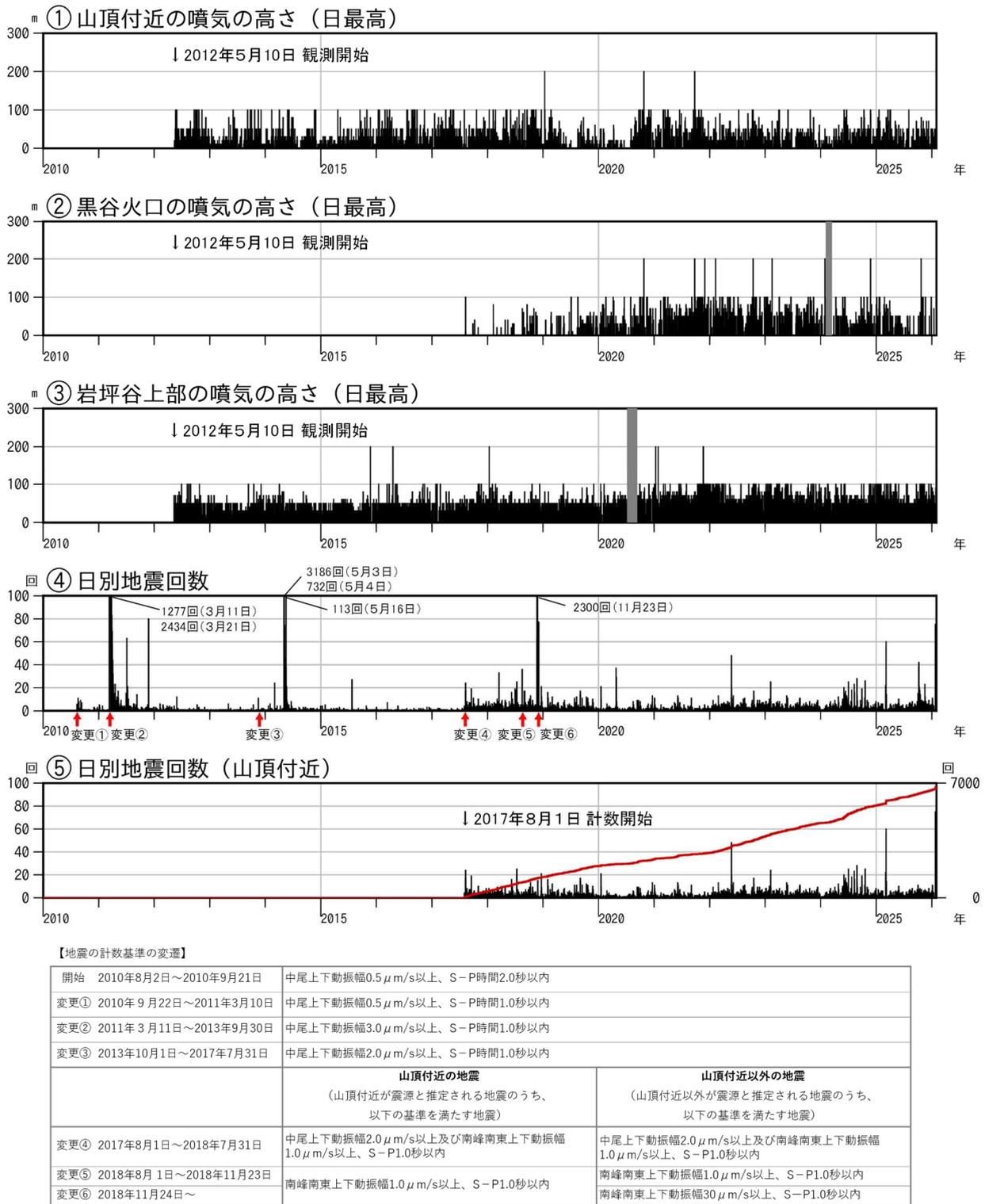


図6 焼岳 噴気の高さと地震回数の推移(2010年8月2日～2026年1月31日)

- ②黒谷火口の噴気の高さは、2024年2月5日から3月14日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ③岩坪谷上部の噴気の高さは、2020年7月7日から9月10日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ④2017年8月1日以降、山頂付近の地震と山頂付近以外の地震を分けて計数していますが、④ではこれらを合計した回数を示しています。図中の赤矢印は計数基準の変更を示しています。
- ⑤山頂付近の日別地震回数（左軸）と日別地震回数の積算（右軸）を示しています。
- ・黒谷火口では、2017年夏頃から噴気が時々観測されるようになり、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えました。

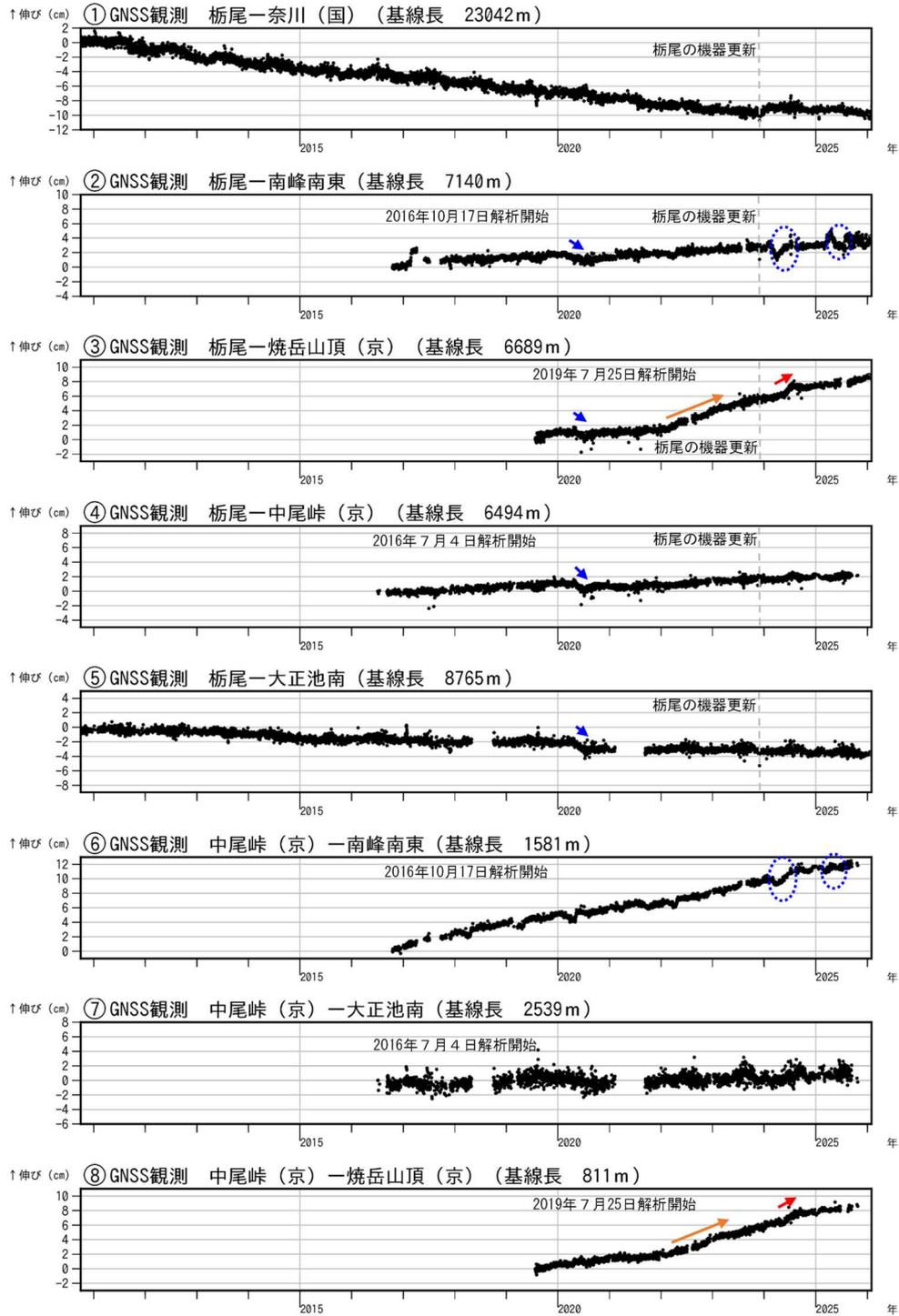


図7 焼岳 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年10月1日～2026年1月31日）

- ・③⑥⑧の基線では、長期的には山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる伸びの変化が継続しています。
- ・③と⑧の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化がみられました（橙矢印）。また、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しました（赤矢印）。
- ・②～⑤の基線では、2020年5月下旬頃から2020年7月頃にかけて、2020年4月以降活発化した山頂の東～北東側のやや深いところを震源とする地震活動に関連すると考えられる変動がみられました（青矢印）。

（前ページ 図7の説明）

図8のGNSS基線①～⑧に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（国）は国土地理院、（京）は京都大学の観測点です。

2023年10月17日の栃尾観測点の機器交換に伴うステップ状の変化を補正しています（①～⑤の灰色点線）。

②⑥の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

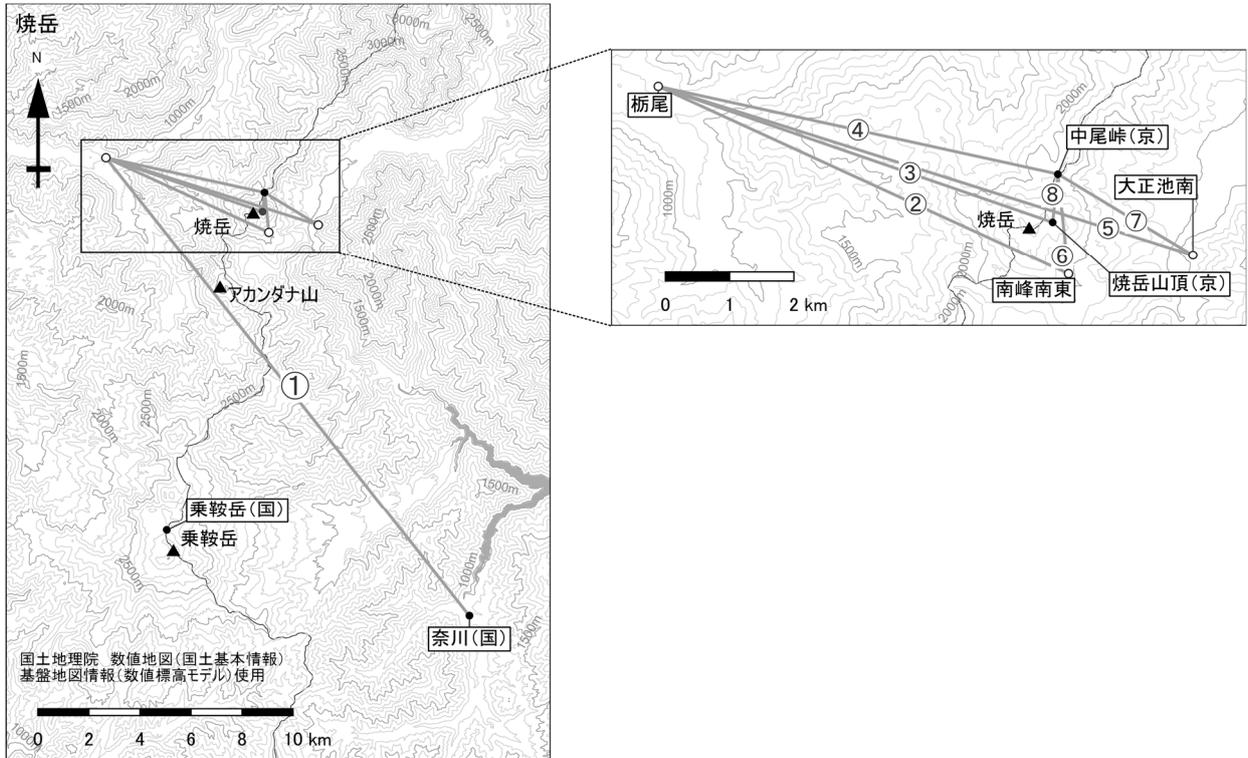


図8 焼岳 GNSS 連続観測点配置

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

①～⑧は図7のGNSS基線①～⑧に対応しています。③⑥⑧は図1のGNSS基線⑥④⑤にも対応しています。

（国）：国土地理院、（京）：京都大学

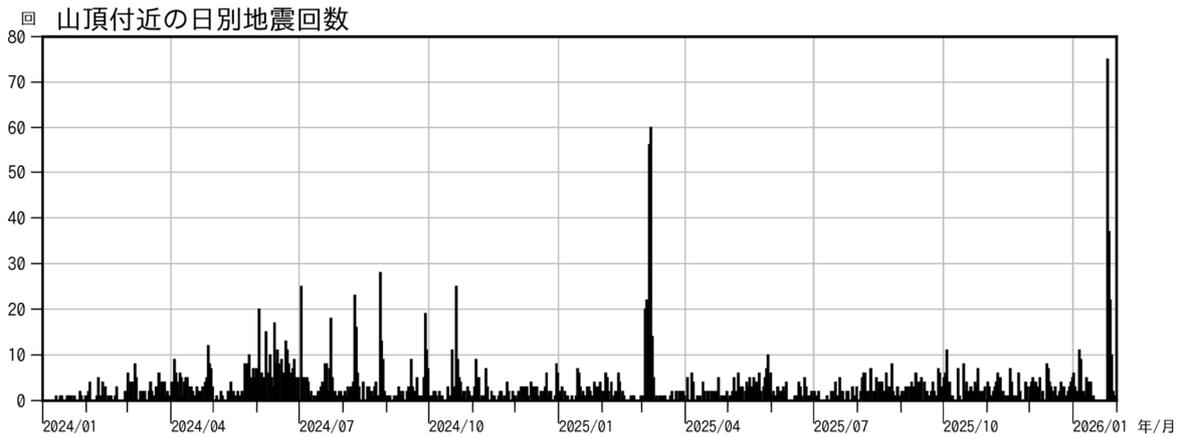
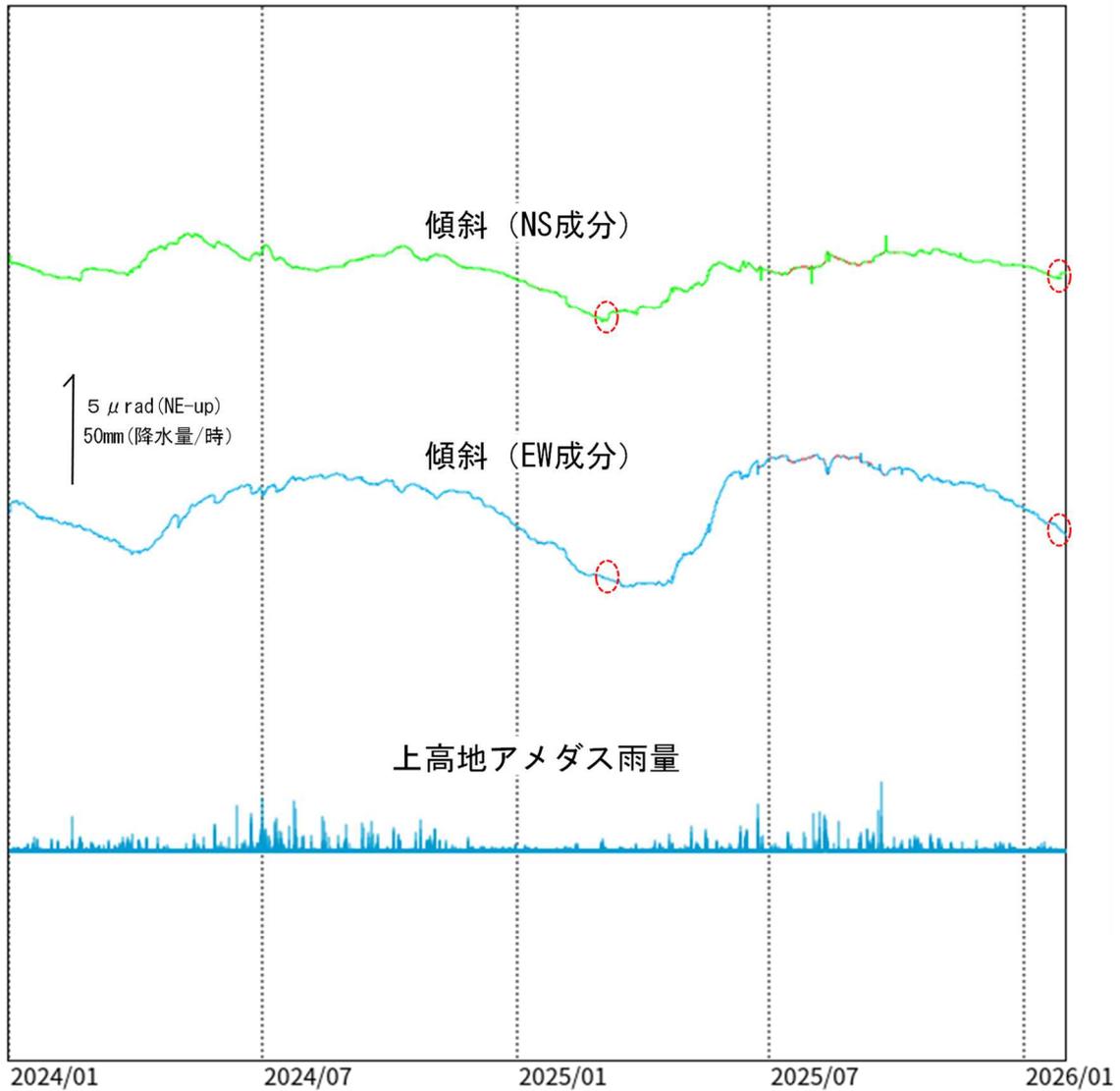


図9 焼岳 南峰南東観測点における傾斜データ（2024年1月1日～2026年1月31日）  
赤線部分は欠測を示します。

- ・傾斜計による観測では、2025年3月8日、2026年1月25日及び1月27日に山頂方向上がりを示すわずかな傾斜変動（赤破線）が認められました。その他の期間は、火山活動によるとみられる変動は認められません。

【焼岳周辺の地震活動】

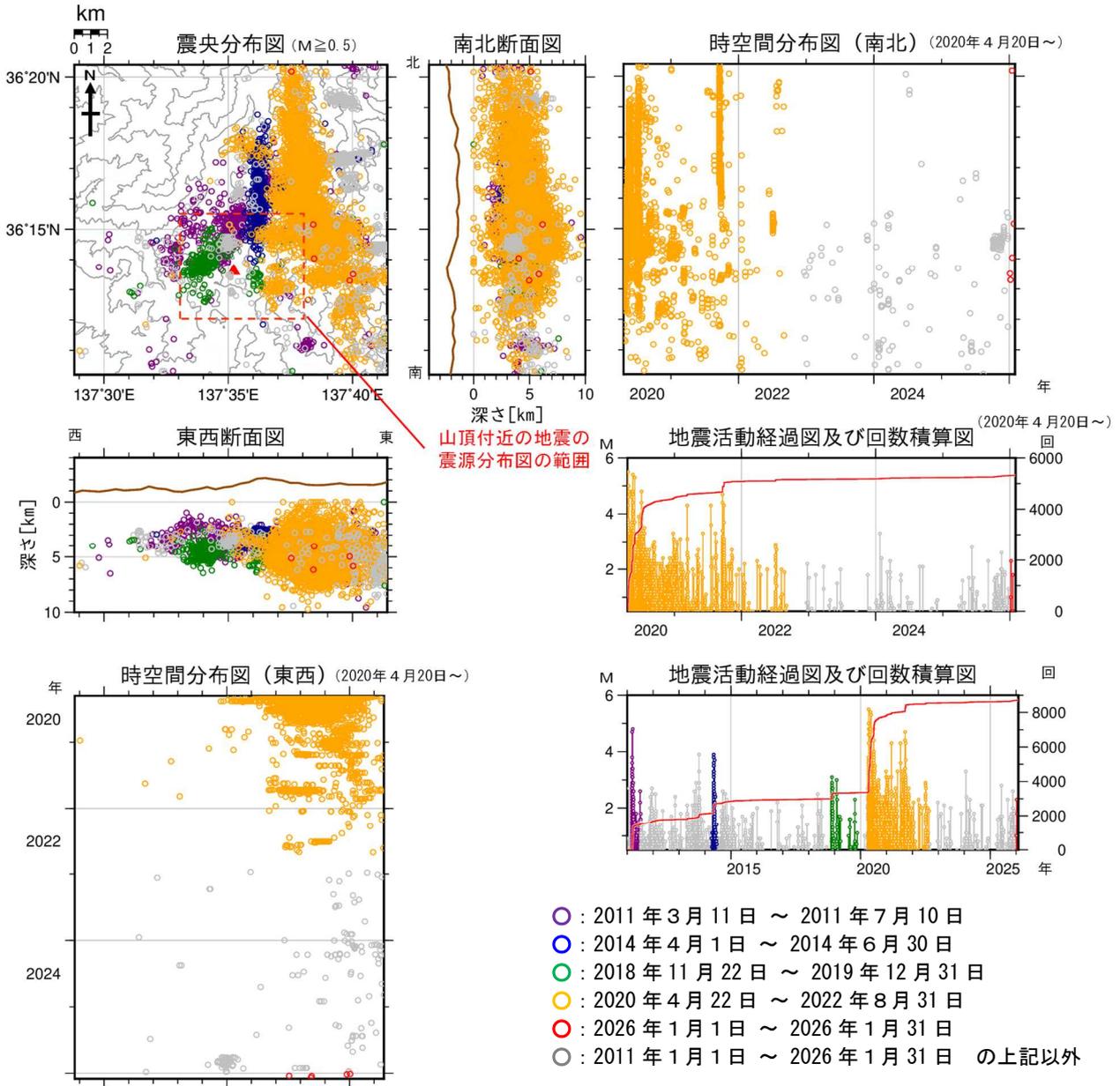


図10 焼岳 広域地震観測網による山体及び周辺の地震活動(2011年1月1日~2026年1月31日)

広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。

M (マグニチュード) は地震の規模を表します。

図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

地震活動経過図及び回数積算図の赤線は積算回数 (右軸) を示しています。

震央分布図中の赤破線領域は、図2で示す領域に対応しています。

- ・ 焼岳周辺では、2011年 (紫丸)、2014年 (青丸)、2018年から2019年にかけて (緑丸)、2020年4月から2022年8月にかけて (橙丸)、地震活動の活発化がみられました。
- ・ 今期間 (赤丸)、震源が求まる焼岳周辺の地震活動は低調に経過しました。

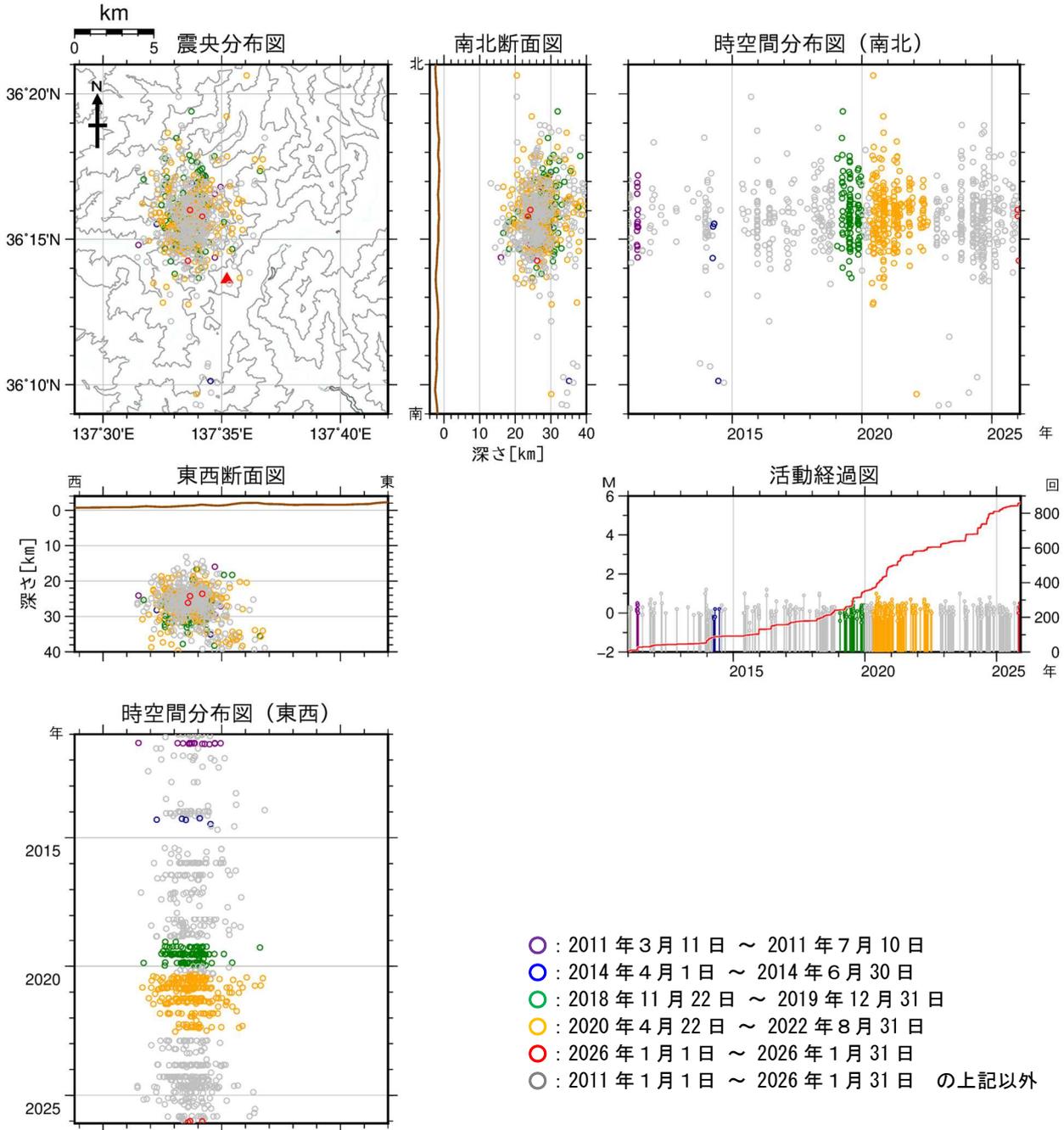
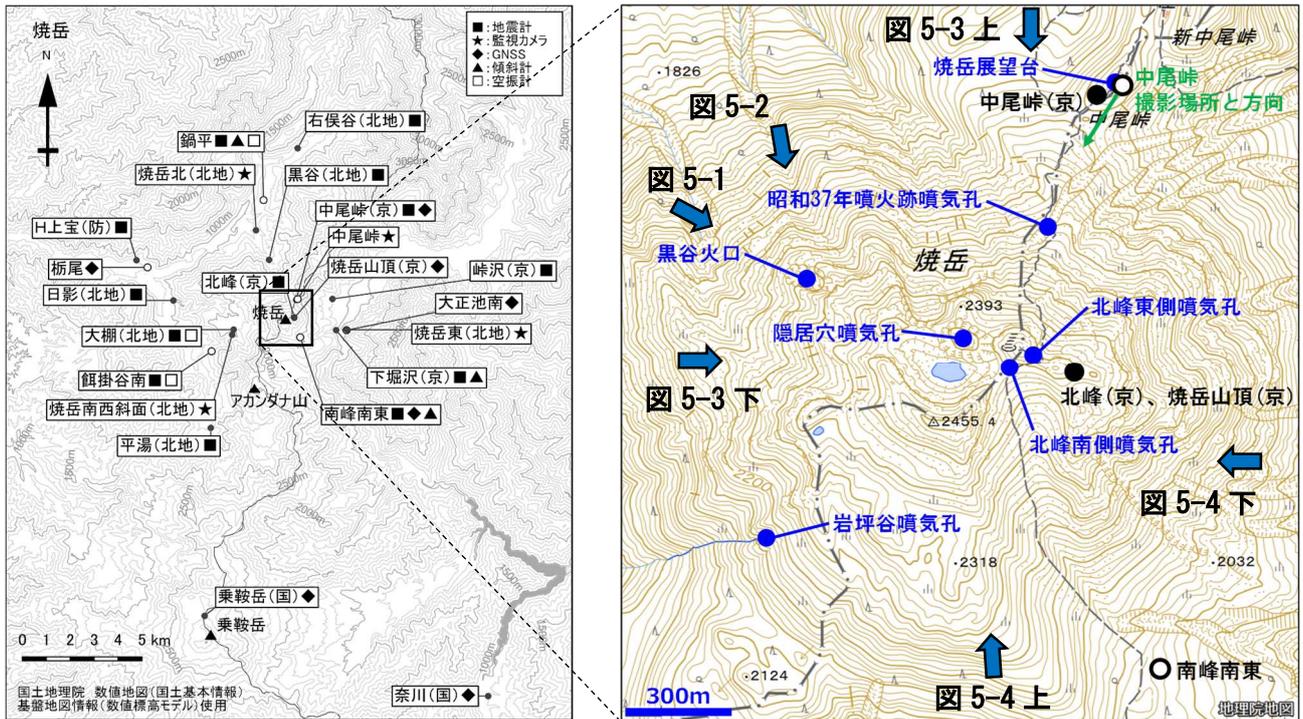


図11 焼岳 広域地震観測網による深部低周波地震の震源分布図（2011年1月1日～2026年1月31日）  
 広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。  
 M（マグニチュード）は地震の規模を表します。  
 図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

- ・ 焼岳の北西側の深い所を震源とする低周波地震の発生状況に特段の変化はみられません。
- ・ 過去には、図10に示したような焼岳周辺の地震活動の活発化がみられた期間付近で、深部低周波地震が増加したことがあります。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局

○は気象庁、●は気象庁以外の機関の観測点を示しています。  
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局

図12 焼岳 観測点配置及び噴気孔位置と図5の撮影方向

右図中の緑矢印は図4の撮影位置と方向を、また青矢印は図5の撮影方向を示します。

## 薩摩硫黄島の火山活動解説資料（令和7年12月）

福岡管区气象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方气象台

硫黄岳火口では、29日02時08分に噴火が発生し、噴煙が火口縁上200mまで上がりました。大きな噴石の飛散や空振は観測されませんでした。噴火が発生したのは、2024年9月3日以来です。なお、噴火の前後で火山活動に特段の変化はみられていません。

火山性地震や火山性微動の発生状況に特段の変化はありません。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり1,000トン前後の状態が長期的に継続しており、時折噴煙が高くなるほか、夜間に火映を観測しています。長期的には噴煙活動や熱活動が高まった状態が続いていることから、硫黄岳火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生する可能性があります。

硫黄岳火口の中心から概ね0.5kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスにも注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和3年4月8日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

## ○ 活動概況

## ・ 噴煙など表面現象の状況（図1、図2-①、図3-①）

硫黄岳火口では、29日02時08分に噴火が発生し、噴煙が火口縁上200mまで上がりました。大きな噴石の飛散や空振は観測されませんでした。噴火が発生したのは、2024年9月3日以来です。この噴火以外では、白色の噴煙が最高で火口縁上1,000m（11月：1,000m）まで上がりました。また、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。

なお29日の噴火の発生時刻は、精査の結果、02時07分から02時08分に見直しました。

## ・ 地震や微動の発生状況（図2-②③、図3-②～④、図4）

火山性地震の月回数は247回（11月：229回）と少ない状態で経過しました。このうち、高周波地震の月回数は63回（11月：46回）でした。震源が求まった火山性地震は、硫黄岳火口付近のごく浅いところでした。

火山性微動は観測されていません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

次回の火山活動解説資料（令和8年1月分）は令和8年2月9日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、京都大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び三島村のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

・火山ガスの状況（図2-④、図3-⑤）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、三島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり600～2,200トン（11月：400～1,000トン）でした。長期的には1日あたり1,000トン前後の状態が継続しています。

・地殻変動の状況（図5、図6）

GNSS連続観測では、島内の一部の基線で、2015年頃から、薩摩硫黄島と竹島間の海域を中心とした膨張性の地殻変動に対応するとみられる長期的な縮みの傾向がみられています。



図1-1 薩摩硫黄島 噴火の状況（12月29日02時06分～11分、岩ノ上監視カメラ）

硫黄岳火口では、29日02時08分に噴火が発生し、噴煙が火口縁上200mまで上がりました。

## 薩摩硫黄島の火山活動解説資料（令和8年1月）

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方气象台

硫黄岳火口では、2025年12月30日以降、噴火は発生していません。

火山性地震や火山性微動の発生状況に特段の変化はありません。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり1,000トン前後の状態が長期的に継続しており、時折噴煙が高くなるほか、夜間に火映を観測しています。長期的には噴煙活動や熱活動が高まった状態が続いていることから、硫黄岳火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生する可能性があります。

硫黄岳火口の中心から概ね0.5kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスにも注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和3年4月8日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

### ○ 活動概況

#### ・噴煙など表面現象の状況（図1、図2-①、図3-①）

硫黄岳火口では、2025年12月30日以降、噴火は発生していません。

白色の噴煙が最高で火口縁上800m（2025年12月：1,000m）まで上がりました。また、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。

#### ・地震や微動の発生状況（図2-②③、図3-②～④、図4）

火山性地震の月回数は190回（2025年12月：247回）と少ない状態で経過しました。このうち、高周波地震の月回数は61回（2025年12月：63回）でした。振幅の大きな火山性地震が時々発生しました。震源が求まった火山性地震は、硫黄岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

火山性微動は観測されていません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

次回の火山活動解説資料（令和8年2月分）は令和8年3月9日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、京都大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び三島村のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

・火山ガスの状況（図2-④、図3-⑤）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、三島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり900トン（2025年12月：600～2,200トン）でした。長期的には1日あたり1,000トン前後の状態が継続しています。

・地殻変動の状況（図5、図6）

GNSS連続観測では、島内の一部の基線で、2015年頃から、薩摩硫黄島と竹島間の海域を中心とした膨張性の地殻変動に対応するとみられる長期的な縮みの傾向がみられています。



図1-1 薩摩硫黄島 噴煙の状況（1月16日、岩ノ上監視カメラ）

硫黄岳火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上800m（2025年12月：1,000m）まで上がりました。



図1-2 薩摩硫黄島 火映の状況（1月16日、岩ノ上監視カメラ）

夜間に高感度の監視カメラで火映（白破線内）を観測しました。

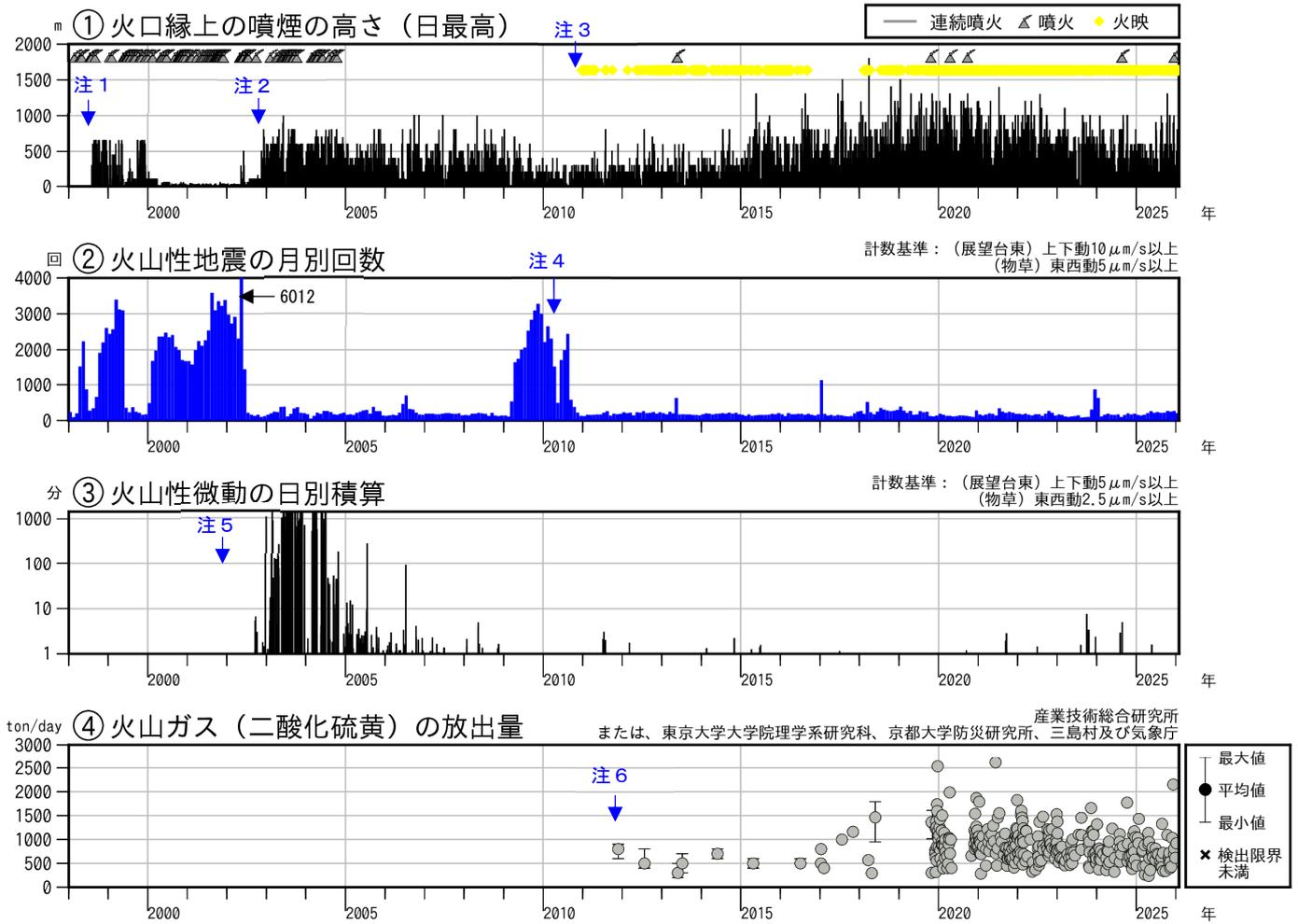


図2 薩摩硫黄島 火山活動経過図（1998年1月～2026年1月）

- 注1 1998年8月1日：三島村役場硫黄島出張所から気象庁へ通報開始。
- 注2 2002年11月16日：気象庁が設置した監視カメラによる観測開始。
- 注3 気象庁が設置した監視カメラの高感度化により火映の観測が可能となりました。
- 注4 2010年1月から7月にかけて、地震計障害のため火山性地震及び火山性微動の回数が不明の期間があります。
- 注5 火山性微動の日別積算時間のデータは2002年以降。
- 注6 2011年11月26日：気象庁による火山ガス（二酸化硫黄）放出量の観測開始。2019年12月から東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、三島村及び気象庁による観測開始。

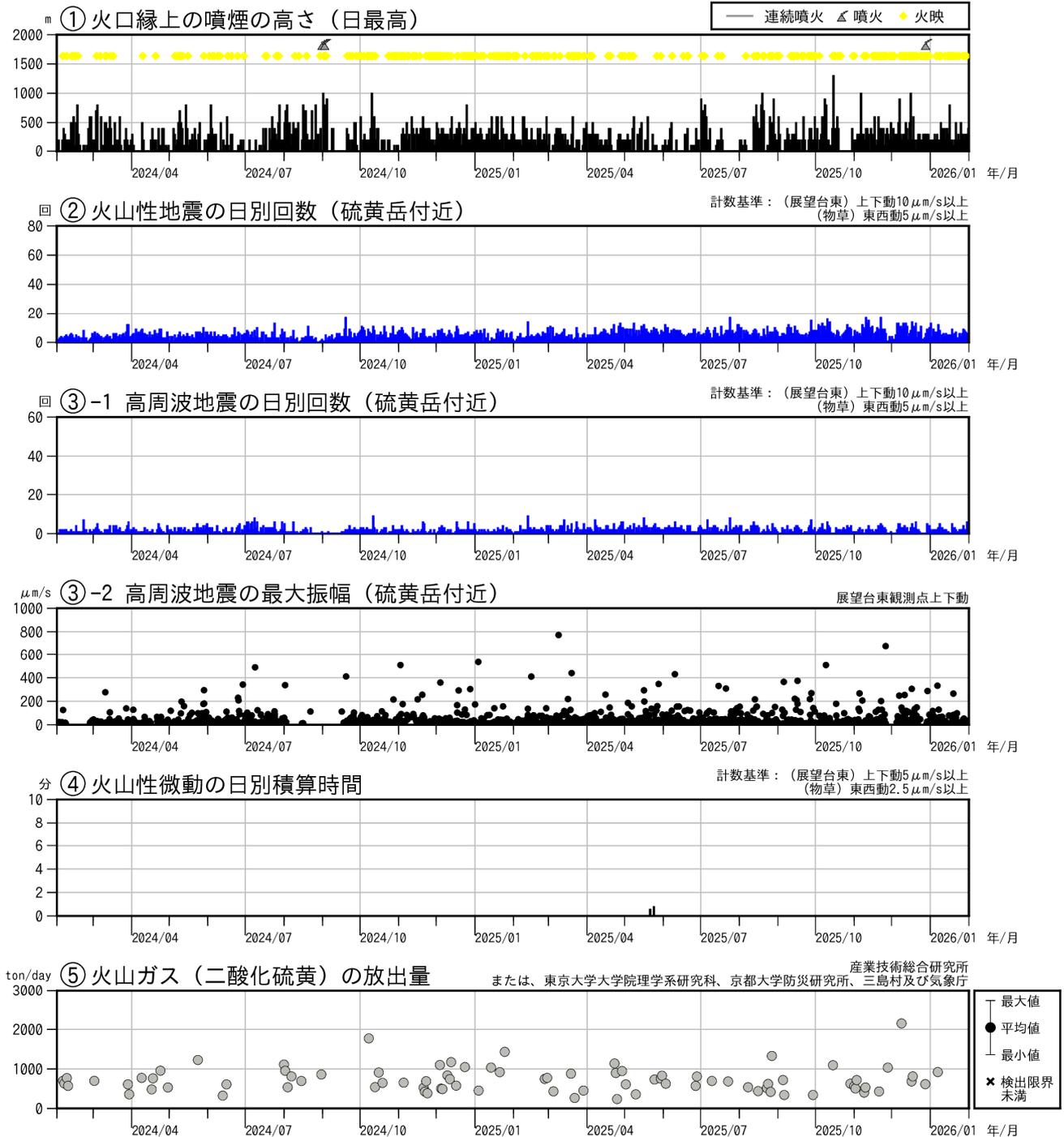


図3 薩摩硫黄島 火山活動経過図（2024年2月～2026年1月）

< 1月の状況 >

- ・硫黄岳火口では、2025年12月30日以降、噴火は発生していません。
- ・白色の噴煙が最高で火口縁上800m（2025年12月：1,000m）まで上がりました
- ・硫黄岳火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。
- ・火山性地震の月回数は190回（2025年12月：247回）と少ない状態で経過しました。
- ・高周波地震の月回数は61回（2025年12月：63回）でした。
- ・振幅の大きな火山性地震が時々発生しました。
- ・火山性微動は観測されていません。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり900トン（2025年12月：600～2,200トン）でした。長期的には1日あたり1,000トン前後の状態が継続しています。

火山性微動は、展望台東観測点上下動5.0 μm/s以上、物草観測点東西動成分2.5 μm/s以上のいずれかの基準を満たすものを計数しています。

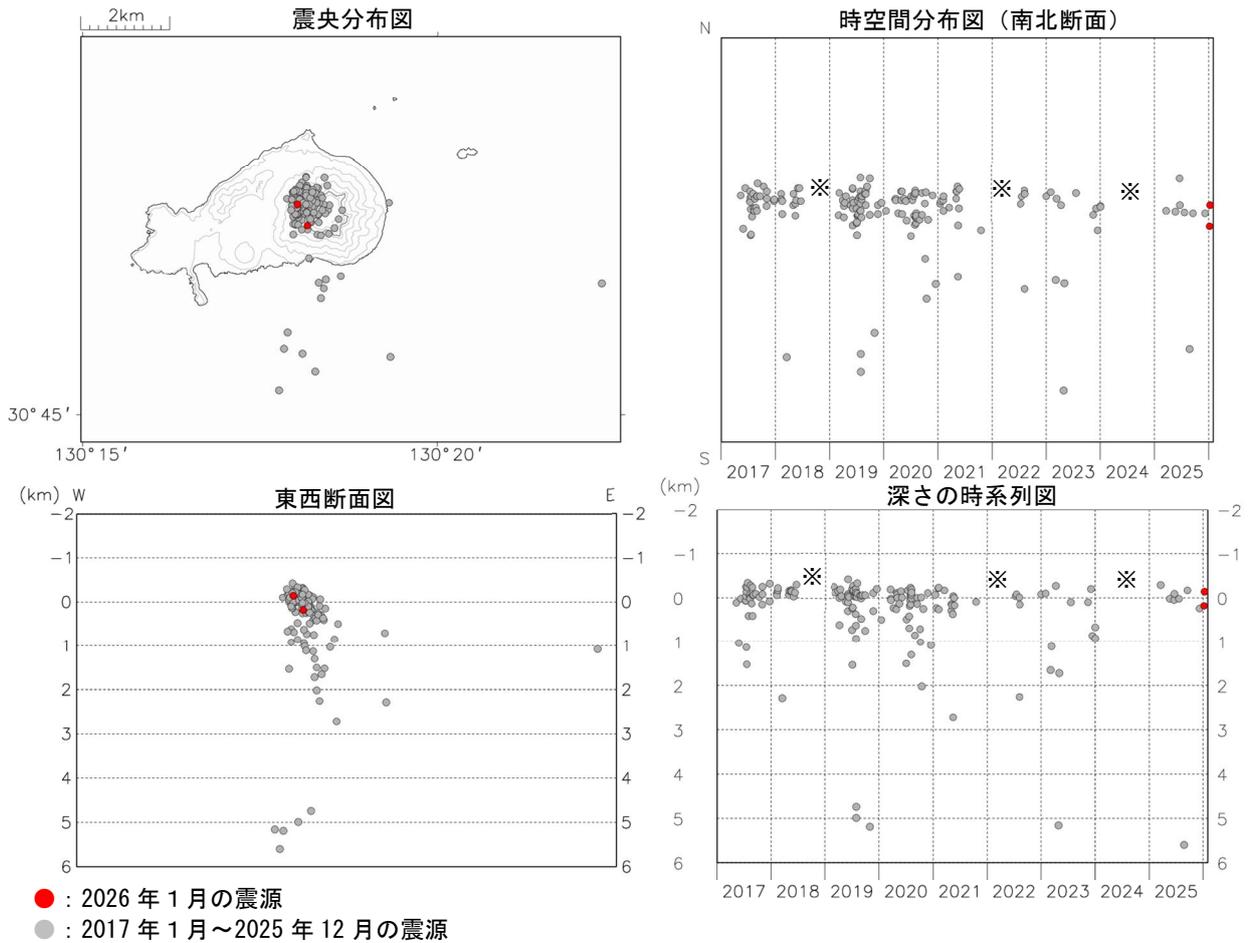


図4 薩摩硫黄島 火山性地震の震源分布図（2017年1月～2026年1月）

< 1月の状況 >

震源が求まった火山性地震は、硫黄岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

※地震計障害のため、2018年6月下旬から2019年2月下旬まで、2021年6月中旬から12月中旬まで及び2024年2月下旬以降の期間では、検知力や震源決定の精度が低下しています。

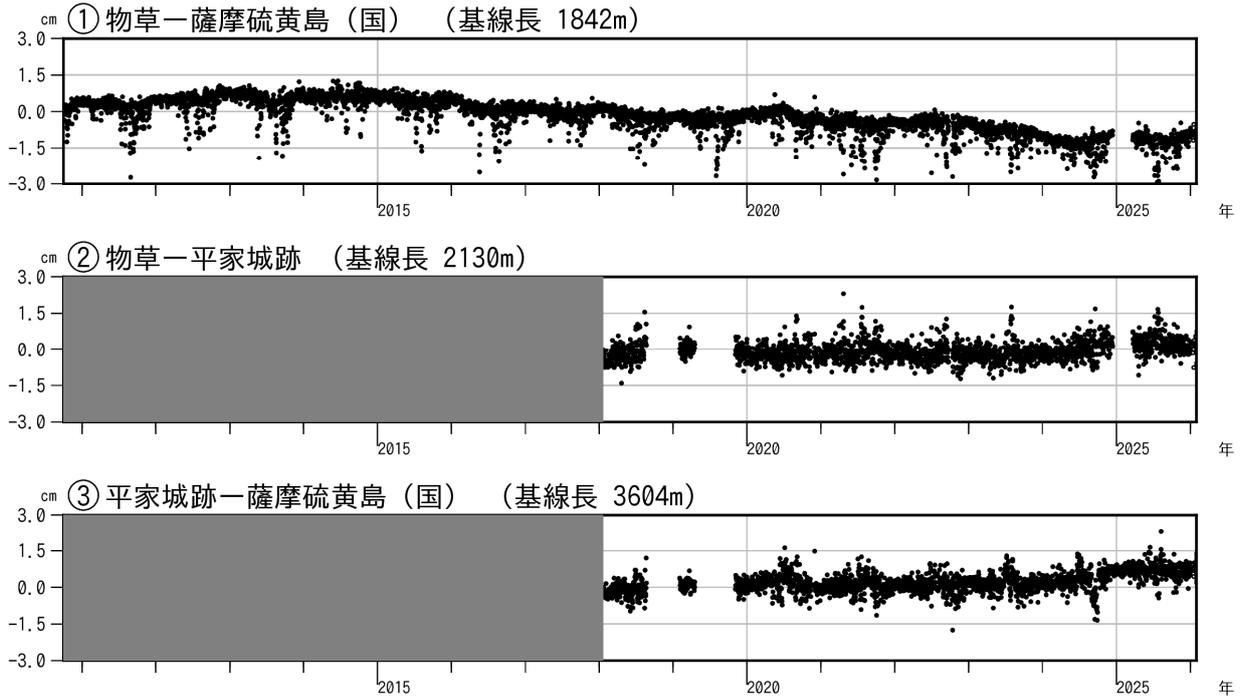


図5 薩摩硫黄島 GNSS連続観測による基線長変化（2010年10月～2026年1月）

GNSS連続観測では、島内の一部の基線（①）で、2015年頃から、薩摩硫黄島と竹島間の海域を中心とした膨張性の地殻変動に対応するとみられる長期的な縮みの傾向がみられています。

この基線は図6の①～③に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

（国）：国土地理院

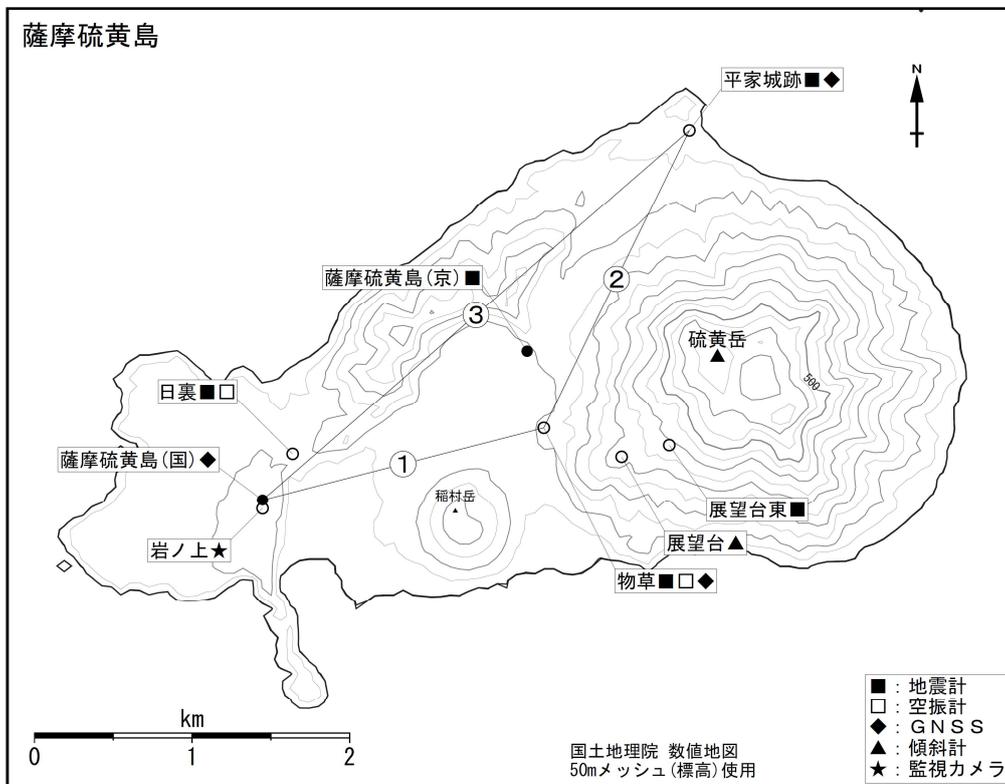


図6 薩摩硫黄島 観測点配置図とGNSS連続観測の基線番号

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（国）：国土地理院、（京）：京都大学

## 諏訪之瀬島の火山活動解説資料（令和8年1月）

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方气象台

御岳<sup>おたけ</sup>火口では、噴火活動が続いています。

噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上1,200mまで上がりました。弾道を描いて飛散する大きな噴石は、火口中心から最大で約200mまで飛散しました。

GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側におけるマグマの蓄積量の増加を示唆する変動が認められていましたが、2025年11月頃から停滞しています。島の西側で発生していると推定される火山性地震は、少ない状態で経過しています。

御岳火口では長期にわたり噴火活動が継続しており、今後も火口周辺に大きな噴石が飛散する噴火活動が継続すると考えられます。

御岳火口中心から概ね1.5kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和6年3月27日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

## ○ 活動概況

## ・ 噴煙など表面現象の状況（図1、図2-①②、図3-①～④）

御岳<sup>おたけ</sup>火口では、噴火活動が継続しています。噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上1,200m（2025年12月：1,000m）まで上がりました。弾道を描いて飛散する大きな噴石は、火口中心から最大で約200mまで飛散しました。爆発は発生しませんでした（2025年12月：0回）。

御岳火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。

十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、集落（御岳火口から南南西約3.5km）では降灰や鳴動は確認されませんでした。

## ・ 地震や微動の発生状況（図2-③、図3-⑥～⑧、図4、図6-2-②）

諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震は、少ない状態で経過しており、月回数は180回（2025年12月：332回）でした。15日10時46分には振幅の大きな体を感じる地震（マグニチュード1.9）が発生し、島内の震度観測点（鹿児島十島村諏訪之瀬島）で震度1を観測しました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

次回の火山活動解説資料（令和8年2月分）は令和8年3月9日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学及び十島村のデータも利用して作成しています。資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震は、月回数は51回（2025年12月：61回）と少ない状態で経過しました。

震源が求まった火山性地震は、島の西側の深さ1～3km付近に分布しました。

・地殻変動の状況（図2-④、図5-①、図6-1、図6-2-①）

GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側におけるマグマの蓄積量の増加を示唆する変動が認められていましたが、2025年11月頃から停滞しています。

ナベタオ傾斜計（御岳火口より南西約2.2km）では、特段の変化は認められません。

・火山ガスの状況（図3-⑤）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり1,000トンでした（2025年12月：観測値なし）。



図1 諏訪之瀬島 噴火活動の状況（1月6日 寄木監視カメラ）

- ・御岳火口では、噴火活動が継続しています。
- ・噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上1,200m（2025年12月：1,000m）まで上がりました。

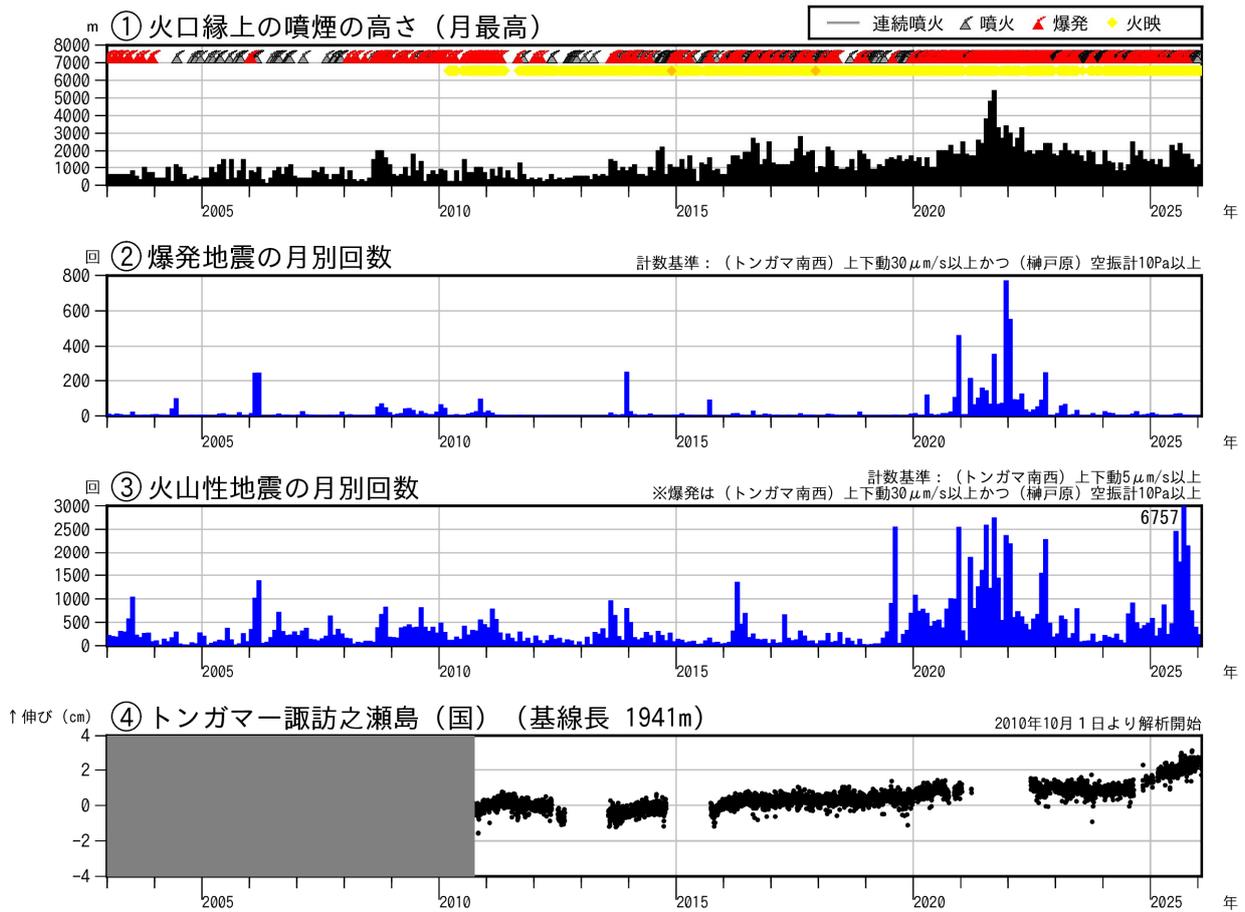


図2 諏訪之瀬島 長期の火山活動経過図（2003年1月～2026年1月）

御岳火口では長期にわたり噴火活動が継続しています。

2024年8月29日から12月3日及び2025年9月10日から10月14日は、寄木カメラ障害のため噴煙の最高高度が観測できていない可能性があります。

ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。

④の基線は図7の①に対応しています。④の基線の空白部分は欠測を示しています。

④2024年9月1日の観測点修繕工事（トンガマ観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院

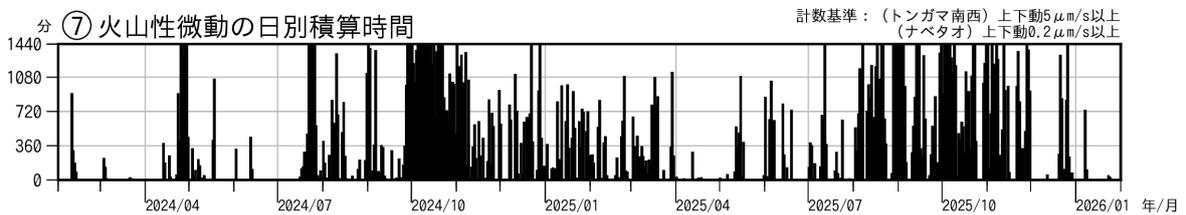
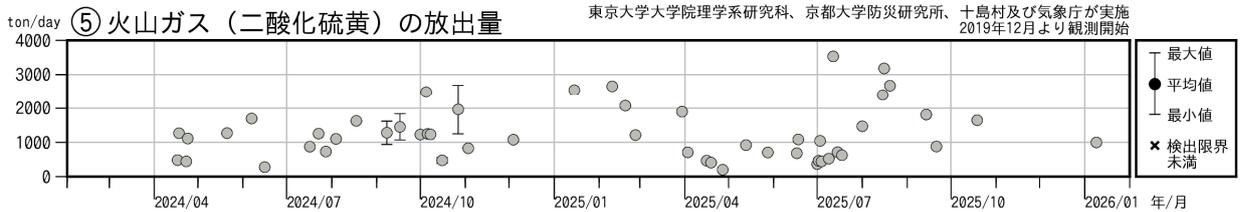
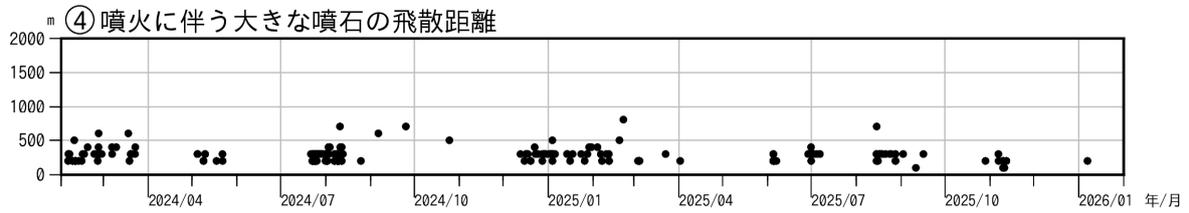
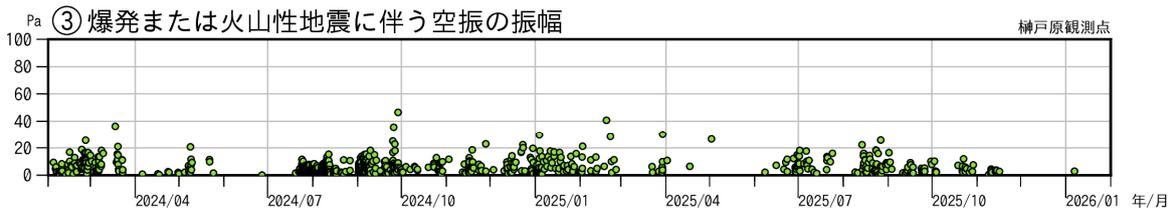
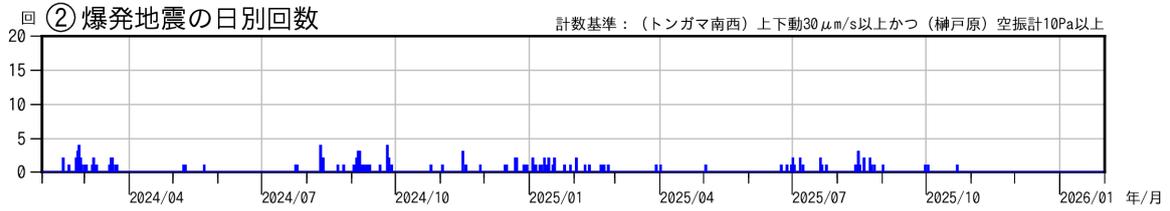
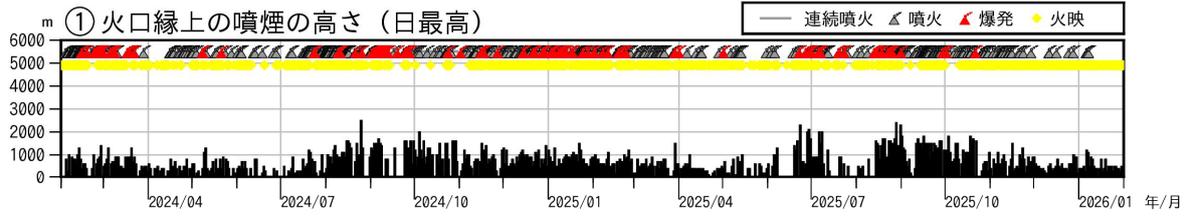


図3（前ページ） 諏訪之瀬島 最近の火山活動経過図（2024年2月～2026年1月）

< 1月の状況 >

- ・ 噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上1,200m（2025年12月：1,000m）まで上がりました。
- ・ 爆発は発生しませんでした（2025年12月：0回）。
- ・ 弾道を描いて飛散する大きな噴石は、火口中心から最大で約200mまで飛散しました。
- ・ 火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり1,000トンでした（2025年12月：観測値なし）。
- ・ 諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震は、少ない状態で経過しており、月回数は180回（2025年12月：332回）でした。
- ・ 御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震は、月回数は51回（2025年12月：61回）と少ない状態で経過しました。
- ・ 火山性微動は主に噴火に伴って発生しました。

2024年8月29日から12月3日及び2025年9月10日から10月13日は、寄木カメラ障害のため噴煙の最高高度が観測できていない可能性があります。

火山ガス放出量は噴火の直後に計測した場合、値が大きくなり、噴火の発生前に計測した場合には小さくなる傾向があります。

トンガマ南西観測点の地震計の機器障害により、ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。

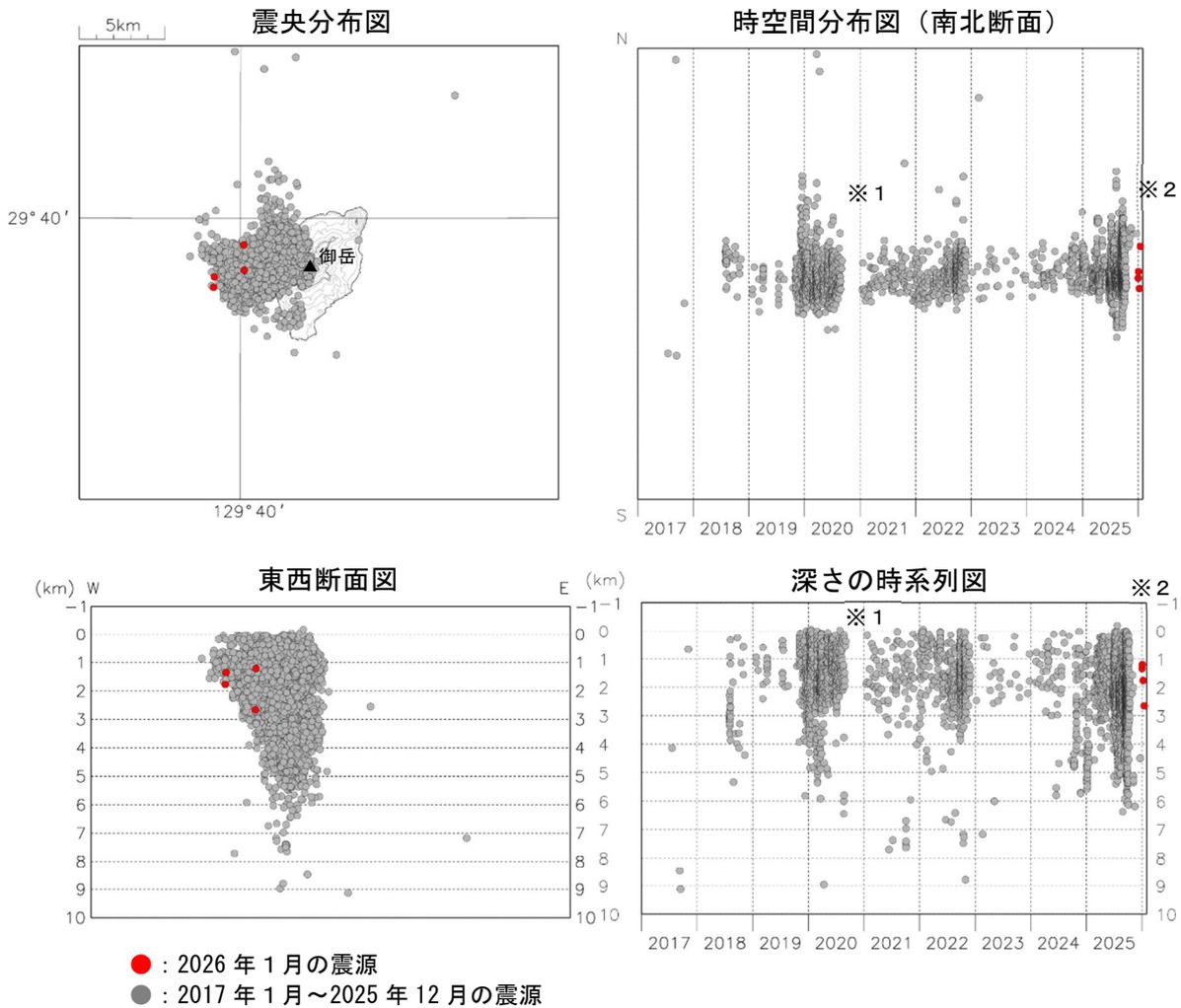


図4 諏訪之瀬島 震源分布図（2017年1月～2026年1月）

< 1月の状況 >

震源が求まった火山性地震は、島の西側の深さ1～3km付近に分布しました。

※1 2020年9月5日から2021年1月10日まで、一部観測点の障害により検知力や震源の精度が低下しています。

※2 2025年10月14日以降、一部観測点の障害により検知力や震源の精度が低下しています。

① ナベタオ傾斜計（時間値）

※傾斜データは潮汐・気温補正済み

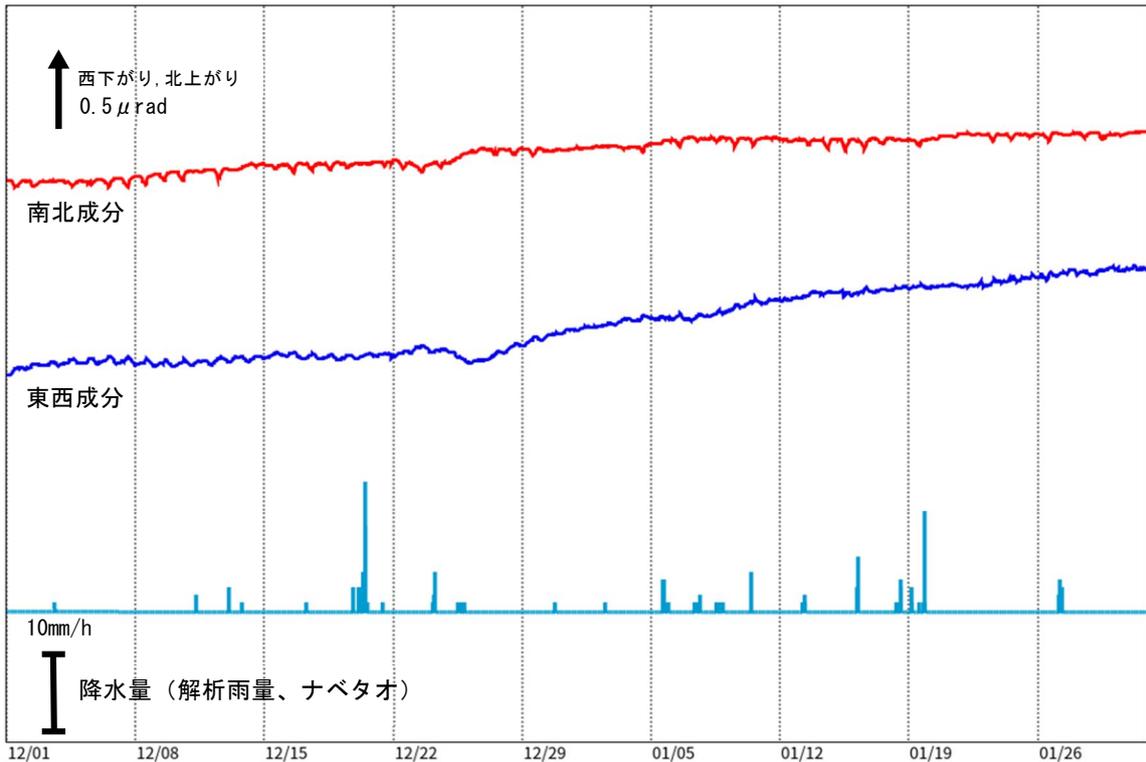
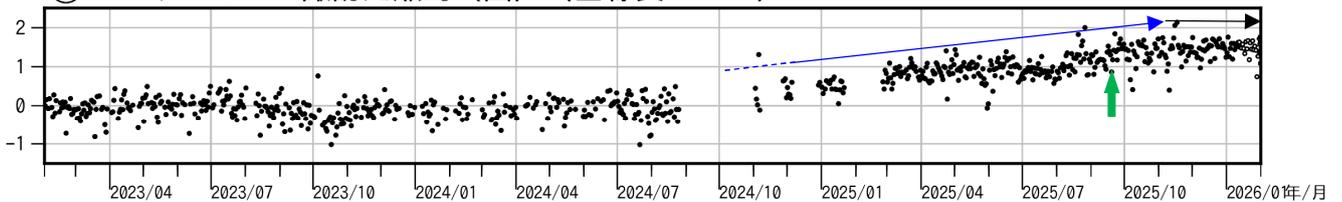


図5 諏訪之瀬島 ナベタオ観測点の傾斜変動と噴火活動（2025年12月～2026年1月）

ナベタオ傾斜計（御岳火口より南西約2.2km）では、特段の変化は認められません。

傾斜データは出水期を中心に降水の影響を受ける場合があります。  
降水量は周辺の解析雨量の値から算出しています。

①-1 トンガマー諏訪之瀬島（国）（基線長 1941m）



①-2 諏訪之瀬島（国）観測点の東西方向の動き

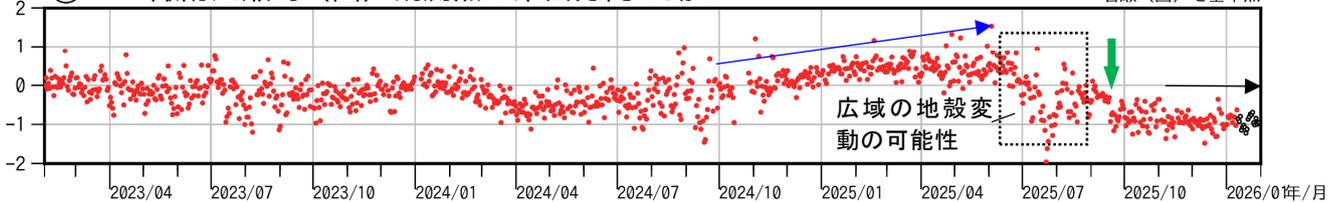


図6-1 諏訪之瀬島 GNSS連続観測（2023年2月～2026年1月）

GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側におけるマグマの蓄積量の増加を示唆する変動（青矢印）が認められていましたが、2025年11月頃から停滞しています（黒矢印）。

①-1の基線は図7の①に対応しています。空白部分は欠測を示しています。2024年9月1日の観測点修繕工事（トンガマー観測点）に伴うステップを補正しています。

緑色の矢印は2025年9月17日の諏訪之瀬島周辺の地震による変動です。

①-2は島外の観測点（名瀬（国））を固定した観測点の東西の変動を示しています。

（国）：国土地理院

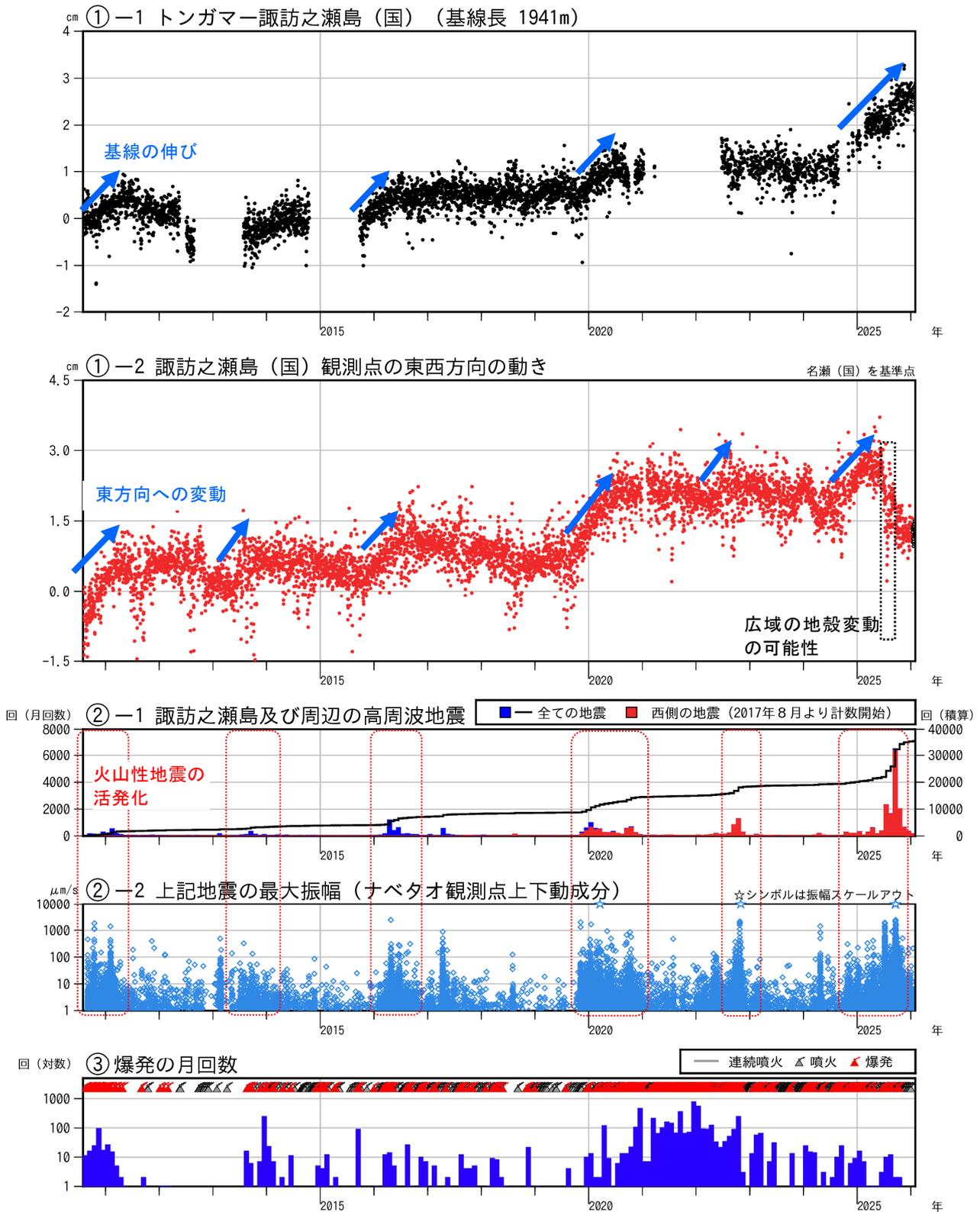


図 6-2 諏訪之瀬島 GNSS連続観測と周辺の火山性地震（2010年8月～2026年1月）

- ・GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側におけるマグマの蓄積量の増加を示唆する変動が認められていましたが、2025年11月頃から停滞しています。
- ・諏訪之瀬島の周辺で発生していると推定される火山性地震は、少ない状態で経過しています。2024年10月頃から2025年12月頃にかけて島の周辺において地震活動の高まりが認められました。

①-1の基線は図7の①に対応しています。空白部分は欠測を示しています。2024年9月1日の観測点修繕工事（トンガマ観測点）に伴うステップを補正しています。

①-2は島外の観測点（名瀬（国））を固定した観測点の東西の変動を示しています。

（国）：国土地理院

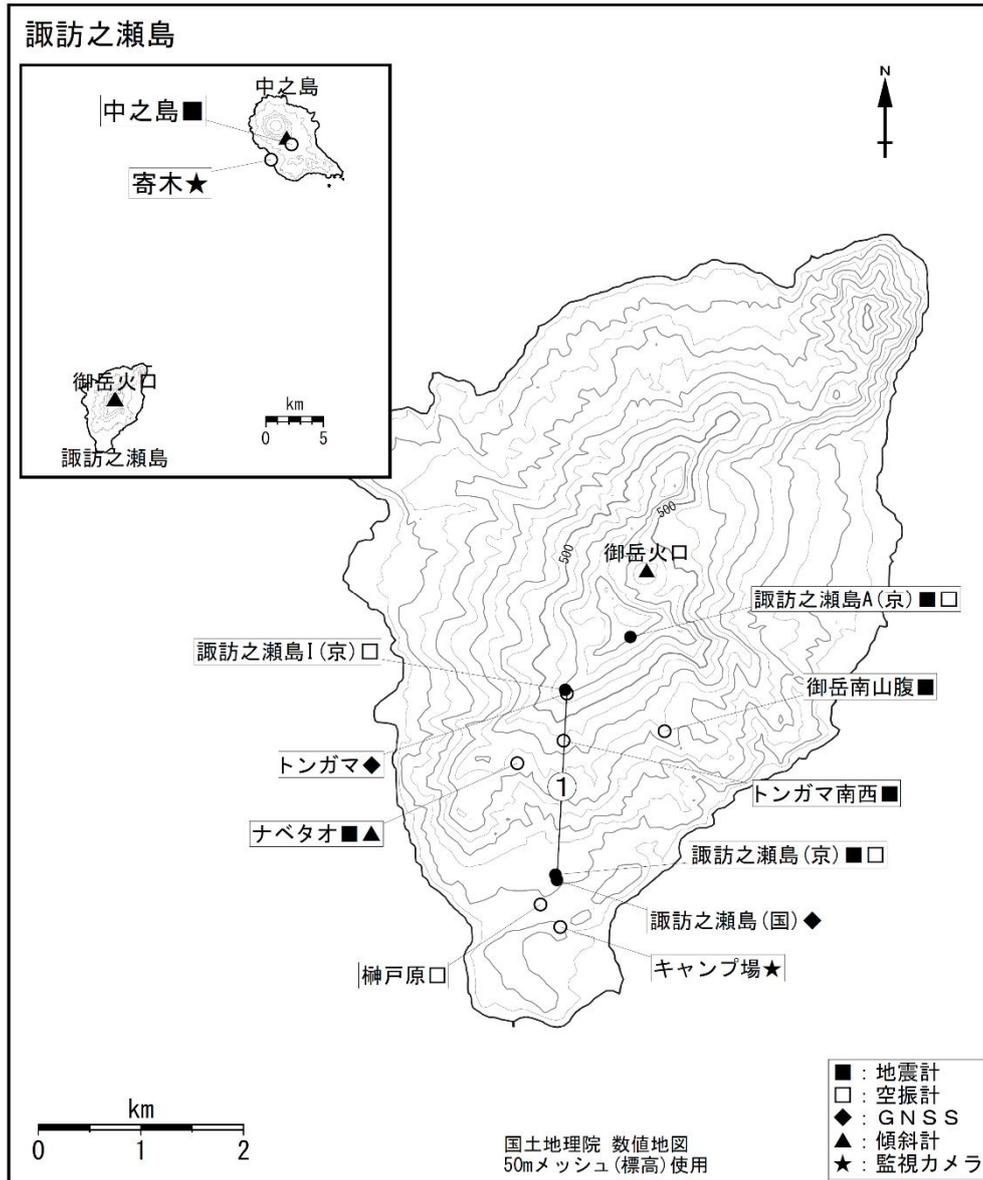


図7 諏訪之瀬島 観測点配置図とGNSS連続観測の基線番号

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
 （国）：国土地理院、（京）：京都大学